第 18 回中部電力原子力安全向上会議アドバイザリーボード　議事要旨

１．日　時：2023 年 1 月 31 日（火）14 時 30 分～17 時 00 分
２．場　所：中部電力本店内会議室
３．出席者：＜社外委員＞
（本店ビルにて出席）小林委員、勝治委員、長﨑委員、横山委員
（Web 会議にて出席）服部委員
＜社内委員＞林社長、増田（博）副社長、水谷副社長、
伊藤副社長、伊原専務、片山専務
＜関係者＞森経営考査室長、度會総務・広報・地域共生本部部長、
名倉原子力部長、加藤経営戦略本部部長（司会）

４．議事要旨
「前回のアドバイザリーボードでのご意見について」、「原子力部門、経営考査室、広報部門の取り組み」、「２０２２年１２月２１日の安全向上会議での指示・議論」、「２０２３年度の取り組み方針」について当社より説明。多岐にわたる議論がなされた。
主な意見は以下のとおり。

○　リスク情報を活用した意思決定を効果的に機能させるためには、「リスク評価」、「優先順位付け」、「意思決定」の３要素が重要。そのうち、「意思決定」は、“判断”と“決断”の２つあり、基準がない中で、リスクをどう捉え、“誰が”オンラインメンテナンス（原子炉運転中における安全設備の保全）実施を決断するか重要な課題。
また、これら実現に向けては、人財育成が重要となるため、足元から準備を進めていくこと。

○　一般論として、故障は緩やかに状態変化し、閾値を超えると発生する。故障に至るまでの変化のメカニズムをデータとして蓄積し、解明していくことで、より客観的な判断基準が設定できる。
中部電力の原子力安全技術研究所（原安技研）は、組織立ち上げ後 10 年で一定の成果をあげている。原安技研で予兆管理をテーマとすることで、データに基づく更なる予兆管理の成果獲得に繋がるのではないか。

○　従来の取り組みに加えて、協力会社に対して遵守事項を具体化したハンドブックを作成することは、興味深い。情報量が多すぎると、受容性が低下するため、現場作業員に対しては、ファンダメンタルズ（原子力発電の業務に従事する者の心得）とハンドブックを上手に使い分けて活用することが望ましい。

○　コロナ禍でコミュニケーションが知らず知らずのうちに低下したようなことはないか。これまでよりも努力してコミュニケーションを取る必要があるとの感覚を持っている。

○　Ｗｅｂ動画「ＲＥＡＬ！浜岡原子力発電所の今」は 30 秒から 50 秒程度の短尺で、インパクトや臨場感があり、設備などのハード面と訓練に関連する内容とのバランスも取れており、お客さまにご覧いただければ理解が進む内容となっている。

○　社内へのコミュニケーションについて、社長が現場に行き、その様子を従業員に共有する取り組みは、経営トップの考えが見える化され、従業員の安心感や信頼感の醸成につながる。経営層と現場の距離の近さはガバナンスにも影響すると考えており、経営トップと現場を近づける努力をしている点は今後も継続いただきたい。

○　電気料金高騰やエネルギーの安定供給をはじめ、社会の皆さまの関心や疑問にお応えするコミュニケーションに引き続き取り組むことが重要。

○　ご意見を踏まえ、安全文化の確実な定着やより良い体制の構築、社会のみなさまとのコミュニケーションなどに活かしてまいる。

以　上